



— 笑顔の花を咲かせる研究 —

Bloom Works トークイベント

音楽と防災文化

2020.11.13.(Fri)

神戸学院大学ポートアイランド

17:15~18:45

第1キャンパスB号館302

※事前申し込み不要

入場
無料

2020年度 現代社会学会主催講演会

主催：神戸学院大学 現代社会学会
後援：神戸学院大学 現代社会学部
問い合わせ先：神戸学院大学 ポートアイランドキャンパス
〒650-8586 神戸市中央区港島1-1-3 TEL:078-974-4206

Bloom Works (ブルームワークス) プロフィール

日本のボイスパーカッション第一人者で防災大学院卒のKAZZ、シンガーソングライターで防災士の石田裕之による、「神戸発・防災音楽ユニット」。

阪神・淡路大震災の経験、被災地支援の教訓から、ポップな歌詞にさりげなく防災のメッセージを織り交ぜ、ハードに染み込む音楽を発信。

オシャレな防災をテーマにアーティストグッズにも工夫を凝らしています。NHK「おはよう日本」、「ラジオ深夜便」などの全国放送で取り上げられたほか、内閣府主催の「ほうさいごきたい2018」、東京都主催「東京都防災展」、兵庫県主催「ひょうご安全の日のつどい」などにも出演。

2019年4月6日、神戸震災復興記念公園(通称みなとのもり公園)にて、防災をテーマに音楽フェス「BGMスクエア」を開催。2千人を動員し、アンケート回答者の91%が「防災意識が向上した」と回答しました。災害支援の全国フォーラムや防災イベントにもフェスのブースを出展中。

グランフロント大阪の公認ストリートアーティスト。78.7MHz さくらFMにて毎月第3金曜23:00-24:00「Bloom Worksの花咲かGG!!」レギュラー放送中。ワンマンライブのほか、防災ちよいデミックパーティーも毎月開催中。Bloom Worksの音楽やライフスタイルを暮らしに取り入れることが、一人一人の防災力アップにつながるよう、独自の活動を展開しています。

何が起きてみんは無事でいてという想いを込めて、ライブの最後の合言葉は「絶対にまた、笑顔で会いましょう!」

現代社会学会主催講演会

「音楽と防災文化」

講演者：Bloom Works

日時：2020年11月19日(金) 17:15～18:45

会場：神戸学院大学KPC B302



楽曲「FAKE」

石田：どうもありがとうございます。100年前、関東大震災の時もデマによって人が人を殺すという大変悲しいことがおきました。今SNS社会の中において、簡単にデマをリツイート出来てしまう、加害者になってしまう、そんな時代が来ています。実際熊本地震の時も、「ライオンが逃げた」とツイートした人が逮捕されるということが起きました。皆さんもSNSの使い方は重々気を付けていらっしゃると思いますけれども、改めてそういったことに気を付けてほしいなということで、一曲目は「FAKE」という曲から聞いていただきました。改めましてみなさんこんにちは。神戸発防災音楽ユニットのBloom Worksです、よろしくお願ひします。歌とギター担当の石田裕之です。

KAZZ：ボイスパーカッションのKAZZです。(♪ボイスパーカッション) こういうパートです、よろしくお願ひします。口でリズムを刻みます。

石田：今日はですね、普段先生方はマスクを着けてらっしゃるかもしれませんが、このシールドで代用させていただくということで、ご了承いただければと思います。いつもですね、僕たちやってるものがありまして。ライブの終わりにお客さんと一緒にやってる合言葉があるんですね。それを最後に、みんなと、声は出さないけれども、せめてポーズだけは一緒にやって一体感を感じてもらって、いろんなものを持って帰ってもらいたいと思うので、最初にちょっと練習したいんですけども、ご協力いただけますでしょうか。

災害は避けられません。でも何があっても、「自助共助の気持ちがあれば乗り越えられる。」そういう思いを込めていつもやってるやつです。「みんな絶対にまた」って僕が言ったら、一緒にお互いを指さして、「笑顔で会いましょう」。普段のライブだったら大きい声で今までは言ってたんですけど、このコロナ禍で出来ないの、ポーズだけで、皆さん心の中で「笑顔で会いましょう」という風にして頂ければと思います。今日はじめましての方ばかりだと思うんですけども、また皆さんと二度目に元気で無事でお会いできることを心から願いながらやりたいと思います。みんなやってくれますか。ちょっと一回練習して、最後講演の終わりにもう一度。今は前説みたいなものです。会場を温めたいなということで、ご協力いただければと思います。やってくださいね、お願いします。じゃあいきます。「みんな、絶対にまた」笑顔で会いましょう、そんな感じです、ありがとうございます。めちゃめちゃ優しい。こんな感じでね、いつもライブの時にはやってるんですけども、これはインドネシアでライブやったときですね。津波博物館で日本人として初めてコンサートさせてもらったときの様子です。こんな感じです。

いろんなところでライブをやってるんですけども、僕ら何のために音楽で防災を伝えているかということ、やっぱり大切な人たちにずっと笑顔で居てほしいと。そのためにもですね、音楽を使ってもっと身近に伝えるということが僕らに出来ることではないかなということで、Bloom Worksというグループ名にもそういう思いが込められてるんですよ。命名したのはKAZZさんなんですけど。

KAZZ：Bloomで「咲く」でしょ、「笑顔の花を咲かせる研究」といいます。実は先ほども紹介して頂きましたが、兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科で、音楽と防災について研究しました。そこで石田さんと知り合ったんです。まだ3年なんですよ、結成してからは、そこからずっと防災音楽でやってますよね、ずっとね。

石田：そうですね、Bloom Worksというグループにはこういう意味が込められていました。普段どんな活動をしているかということ、基本はライブなんです。いろんなイベントに出たりとか、フェスに出たりとかしつつ、自分たちでもフェスを主催しています。さっき紹介して頂いたみなとのもり公園のフェス、これはですね、みなとのもり公園が広域災害避難場所に指定されているということで、避難した時に使えるここの防災機能を知ってもらいたいなということで、ここで集まって毎年やろうということでやっております。今年はコロナ禍で残念ながらできなかつたんですけども、来年にはまたやりたいなという風に思っております。ライブの傍ら、被災地にも結構いろんなところに行かせて頂いてますね。例えば、活動を始めてすぐにですね、九州北部豪雨の被災地で、大分県日田市に行かせて頂いて、これは地域の集会所で慰問のコンサートをさせて頂いた時の写真です。去年は北海道の胆振東部地震の被災地にも行かせて頂いて、厚真町のみなさん

の前で歌わせていただきました。震度7の地震でしたね。

KAZZ：山というか土地一帯が全部崩れてるんですよ。あれを見たらどれだけひどい地震だったのかなと思いましたけどね。やっぱり実際に行ってみるってことはどこでもものすごく大事かなと思います。

石田：あれから2年経ちました。あの震災から2年ですね。さっきもちょっと写真見てもらいましたけれども、インドネシアのアチェ州というところに行きまして、ここでもコンサートしたりとか。あとでちょっと話すんですけども、ここで素晴らしい色んな出会いもありました。今日はその話もたっぷりお届けしたいと思います。もう一つがですね、防災啓発ということなんですけれども。こちら、僕たちは防災をファッションでももっと身近なものにしていきたいなということで、こういう「UDEBUE」というものもグッズとして売っています。これは曲の中で使えるアイテムなんです。ロゴのついたリストバンドなんですけど、こっち側に笛が付いていて、普段使い出来るリストバンドのこっち側で、もしも地震で生き埋めになったりしたときに、救助が呼べるということなんです。

KAZZ：やっぱり粉塵の中やったら声が出せないのよね、こうやってみんなで笛を持つといてもらおうと。それも、変な話ですけどやっぱりかっこ悪い笛はずっと持つとけかないから、ちょっとおしゃれな感じでね。「普段に付けてても全然良いやん」と、「どんな服装でも合うやん」という形で、いろんな色を作ったりしてますね。

石田：軽く吹くだけですよ。通る音が出るように設計されていて、いまやってみましょうか。(笛の音) 結構うるさいですね、耳にキーンときますね。

KAZZ：つんざくような感じでしょ、でもこれが大切なんですよ。ちょっと吹くだけで遠くまで聞こえる、これがすごい大事。

石田：KAZZさんが仰ったように粉塵の中、そしてトラックや重機の行き交う中で救助を呼ぶというのは、地声では相当難しいので、みなさんもカバンの中とかね。でもカバンだとなかなか取り出せないかもしれないですよ。だからこそ身に付けておいてほしいなと。

KAZZ：これ実はお風呂でも付けれるんですよ、このまま洗っていただけるので。

石田：曲の中でこれをみんなで一斉に吹こうというパートを付けた曲がありまして。ちょっとEDMみたいな感じの曲調なんですけど、ここで「1, 2, 3, 4 (笛の音)」。こんな感じの曲を作ったりもしております。お客さんがね、ファンの方がこの曲を気に入って「一緒に吹きたい」と思って買ってくれることが、結果的に防災につながっていくと、そういった狙いがあります。ほかにもいろんなグッズを作っています。これはですね、六甲山の間伐材を使っているピックなんですけれども、このほかにもコースターを作ったりとかね、フォークなどのカトラリーを六甲山の間

伐材で作っています。これなんで間伐材が大事かっていうと、山をしっかりと手入れして土壌を豊かにしていく、そのことによって大雨が降っても土砂崩れがしにくい強い山を育てていこうと、そういう思いを込めてやっております。

KAZZ：この前もね、大分県日田市に行った時も、もう山崩れで、なんで山崩れが起こるかって言ったら石田さんが言ったように、木が根が生えてないので、総崩れしてしまうわけですよ。その木が川に流れて、川を堰き止めるんですね。そうしたら村全体が沈んじゃう。っていうのは日本中どこでも起こりうるっていう状況ですよ。だから本当に、日本中怖いことになってるかもしれない。結局、木を整備できてない、もしかしたら何も考えずに植えてしまった人間が、それを作ってしまったのかもしれないよねっていうような提議も僕たちはさせてもらっています。

石田：現代社会学科の皆さんは、そういったいろんな社会問題にも関心があると思います。防災をいつも頑張ってるしゃるみなさんもそうだと思うんですけども、実は防災以外のところでも、めぐりめぐって防災と関わっていることって色々あると思うんですね。日本の林業を守るっていうことも、もしかしたらそのうちの一つではないかなということです。実は僕このギター去年オーダーメイドで作ったんですけど、これ全部日本の国産材で作りました。六甲山の間伐材もところどころ使ってもらってまして、日本の木でもいい音がするんだよっていうことを発信していけるようなアーティストになっていけたらなということで、そういったところも取り組んでいます。

KAZZ：さぞお高いんでしょうね。

石田：値段はまあいいじゃないですか。まあまあ高いですけども、そういう思いをね、広めていきたいなと思っております。あと自分たちだけではできない事、企業の皆さんと理念を一つにしてコラボ商品も開発させてもらっています。これはフェリシモさんの防災リュックなんですけれども、佐藤菜里さんがモデルになってくださって、今日は実物も持ってきたんですけども、時節柄まわして見ては頂けないので、あとで置いておきますので見て頂ければと思うんですけども。様々な防災機能がありますので詳しいことはホームページとかご覧いただきたいんですけども。一番大事なものは、防災リュックらしくない、花柄だっていうことなんですね。女性の方でも普段使いしてもらえる。これは持ち出し袋ではなくて、0次避難、日ごろ通勤通学の最中に災害が起きて、帰宅困難になった、でもそれを乗り切れる、そういったところを想定して作っております。なのでみなさんも持ち出し袋はご家庭に用意しているかもしれませんが、それ以外の様々なシーンのことも想定してですね、今カバンの中のものだけで一日歩いて家まで無事帰れるかなとか、そういったこともちょっと想像して頂ければ嬉しいなと思います。

KAZZ：これ僕の知り合いとかも結構持ってます。ぜひぜひ皆さんも一回見てみてください。

石田：フェリシモさんともこういうコラボをしたりとかですね。あとはいろんな防災の座談会とかも出させて頂いて。この間は蓬莱大輔さん、気象予報士の蓬莱さんと出させていただきました。そういったちょっと変わった活動をやっているということで注目していただきまして、内閣府の

防災国体に出たりとか、国土強靱化の民間事例として取り上げて頂いたりということで、ちょっと一見するとお堅い感じがするかもしれないんですけども、実は自分たちが狙っているのは、一番大事なのはそこではなくてですね、防災をもっとカジュアルにしたいと、もっとみんなの自分にとっての当たり前のカルチャーにしたいというのが一番の狙いなんです。やっぱり一部の意識の高い人、一部の関心の高い人だけのものにしてしまうと、何か災害が起きたときに、それ以外の人たちが「まさかここでこんなことが起きるとは思わなかった」って、全国どこいっても同じこと仰ってるんですね。それを無くしていきたい。そのためにもカルチャーにしていく、それを出来るのが音楽ではないかなというのが僕らの信念です。

KAZZ：僕たちもね、普通、防災と音楽って、みんなの頭の中で思い描くのは、ちょっといい子的な音楽というか、例えばNHKで流れてるようなああいう音楽なのかなって思うかもしれないけど、でもそうところじゃないよねっていう。もちろん僕たちもNHKには出たいですけども、実際、防災を伝えるためには一般の方々に届けないと結局意味がないよね。だからこそポップスしよう、ロックしよう、ダンスミュージックしようっていったところが、僕たちの指針です。

石田：さっきもちょっと言ったことなんですけれども、防災意識の高い人たち、いま一部の人たちで一生懸命やってるけれども、なかなか広がらないということが大きな課題になっています。そこをですね、僕らが音楽を通じてもっと裾野を広げたいなど。防災はそんなに知らないけれども、興味ないけれども、楽しいことだったら、カッコいい音楽だったら関わりたいなどと思っていただける。そういった方々に伝わる活動をしたいというのが自分たちの信条です。なので、やってるのはあんまり啓発ソングっぽくしないということが狙いなんです。ということで、次の曲も全然啓発ソングっぽくないんですけども、こんなやつを聞いていただきたいと思います。

楽曲「171」

石田：はい、今日で覚えてください。災害用伝言ダイヤルは171ということで、実は僕の身長も171cmで、男子の平均身長も171cmなので、あと1cmあればちょっと優越感があつたのになつていうしょうもないことをずっと歌ってる歌なんですけれども、最後のところで覚えてほしい災害用伝言ダイヤルと一緒にだつていうそういう歌になっております。やっぱりね、災害が起きると、大切な人のことを思って「大丈夫？」って電話かけまくりたくなりますよね、みんなね。でもそれで輻輳が起きてしまつて、電話がつながりにくくなると本当に救助を求める人が繋がらなかつたりとか。あと被災した後の人は充電が出来ません。そうすると携帯にジャンジャン連絡があると、すぐにバッテリーが切れてしまいます。なので、出来るだけ災害用伝言ダイヤルで安否確認をしていただきたいということで、ぜひ覚えておいてください。使い方は毎月1日、15日にテスト運用されておられますので、みなさんも試しに使って頂ければと思います。はい、ということで、次は117ですね。ここからはですね、ちょっと話が変わりまして、僕らなんでもそも防災をテーマに活動しているかっていうと、それぞれルーツがあるんですけども、まずはKAZZさんの震災経験の話から振り返って頂きたいと思います。

KAZZ：はい、先ほども僕のプロフィールを言っていただきましたが、神戸市の長田区出身です。阪神・淡路大震災で被災しました。家全壊になりました。で、親戚一同焼け出されたんですよね。

石田：当時こんな様子だったんですよね。

KAZZ：そうですそうです、こういう感じね。これ夜ですけれども、昼間でもこういう感じだったんですよ、煙が出て。それこそ僕、当時は神戸市長田区に住んでてね、なんで僕がまだ生きてるかというところ、たまたまその日だけ違うところに居たんです。でも、僕の家近くにはおばあちゃんが住んでたから、もうとにかく「おばあちゃんを助けに行かなくちゃ」だけで長田に走りまわった。長田に走ったらもうこの状況ですよ。もう熱い。どっかから「ガスや」「こっちおったらあかん」って。ちょうどね、僕は長田から離れた学園都市っていうところに居たからね。学園都市からずっと長田の方に行くまで、板宿あたりがこんな感じでした。もうとにかく、焼けたにおいとかもして。おばあちゃん自身は助かりました。その時は会えなかったんですけども、長田区役所が避難所になってまして、そこの避難所にしばらく居ました。

石田：これが被災したご自宅あたりですよね。

KAZZ：そうです。この右前のレンガが落ちてるんですけど、この手前は焼けてるところで、たまたま僕の家は壁面まで火が来たんだけどそこで止まったから、残ったのね。残ったんだけど、中は梁とかも折れてるんで全壊です。だから物とかも出せなかったですね。僕自身は最初なにをしていたかというところ、もちろんおばあちゃんが避難所で、僕も最初は避難所に入りましたから、何か物を届けたりとか。長田全部がこんな感じになってるので、みんながここにいるわけですよ。そしたら「なにかしなくちゃ」と思うねんね。ボランティア元年って言われるでしょ、ボランティア元年っていったい何なのかと言ったらね、「隣にいる人大変やから助けよう」という気持ちでそれを生んだんやと思うんよ、僕。今から考えるとボランティア元年って、ボランティアボランティア言うけど、ちゃうって。この状況になったら助けると言うって。

ほんで僕は何をしてたかって言ったら、こういうところにずっといたら、お風呂とかないじゃない。水道管破裂してるから。長田がなんで燃えたかって言ったら、水道管が破裂して水が出なかったからなんですよ。水が出なかったからそのままずっと、長屋を中心に燃えていったんですよね。水が出ないから、自衛隊の人とか来て後でお風呂とか作ってくれたけども、お風呂がないんで。でも長田からちょっと離れた加古川とか姫路までいけば、お風呂屋さんがあったわけです。だから車で、友達とか親戚の人たちを毎日毎日お風呂屋さんまで送り届けて、お風呂に入れて、また帰ってくるっていうことをやってました。これってね、何が大切かって、僕はいつもこれ言うんですけど、お風呂って大事。トイレも大事だけどね。トイレは衛生っていうところでものすごく大事でよくテーマになると思うんだけど、お風呂は「生きよう」と思うから。この状態ですってると、変な話だけど、変なおいとかするんですよ。自分自身もなんかこうどんどん先が真っ暗になっていく。でもリフレッシュできるかどうかってものすごく大切で、その時は「お風呂連れてってあげよう」、「行こう行こう」って。最初はそういうことをしていました。それが長いこと続いて、僕が仮設住宅入るまでかな。

入るまでの間に、僕音楽やってたんで、当時はアカペラというジャンル。僕はそのアカペラというジャンルを最初にやり始めて、ボイスパーカッションを最初にやったからパイオニアって言われてるんだけど、元町の商店街の真ん中らへんの、カルディがある道路の前に、復興屋台村が出来たのね。復興屋台村って何かというと、当時全部潰れてるから、食べるものとかがないじゃない。だから屋台が出来たわけよ、焼きそばとかたこ焼きとか、6軒ぐらいのやつが集まって。これですね。で、それだけやったら人も来ないやろうってことで、真ん中に2畳ぐらいのステージが出来たの。そこで僕は歌ったのね。ボイスパーカッションも当時からしてたから、ボイスパーカッションしたら、めっちゃ喜んでくれるねん。それを見たときに、これを僕は仕事にしたい、これでプロになりたいなってその時思った。こんだけ笑顔になってくれる、おじいちゃんとかおばあちゃんとか、家とかも潰れてるわけだから、大変な中で食べに来てる。その人が「良かったわお兄ちゃん」「元気になったわ」って言われたら、こんな素晴らしいことないなって。この気持ち世界に届けていきたいと思ったのがその時です。それが今を動かしていますね。そこから自分でグループ組んで、Baby Booっていうグループ。いま検索しても出てきます、東京で活動しています。Baby Booっていうグループを組んで、ワーナーミュージックからメジャーデビューしました。このグループは知ってるかもしれないですが、Permanent Fishで韓国でデビューしました。

で、当時からですね、そういう状況だったよっていうことを、僕は語り部としていろんなところで学校講演をしながら語ってきました。語ってきたんですが、みなさんもそうですけど、25年、26年経つと、昔の話じゃない？ なかなか僕がこうやって、リアルに話そうとするけども、ちょっと「ああそうやったんや」ぐらいに思うところってあるんちゃうかな。だから熱量って必要なんだけどね。語り部をしてたら、どんどん「昔と違うな」って思うようになって。でもこのままやったらあかんの、南海トラフがすぐ来るって言われてるのにも関わらず、この状況。だって阪神・淡路大震災が25年、26年前にあったにも関わらず、また同じ状況が起こるかもしれへんの、そこに対策なんて誰もしてない。これやべえなと思って、僕もいろいろ考えて、語り部というだけじゃなくて、防災というのを自分の中に入れて、それをしゃべる人になろう、それを歌と共にしゃべる人になろうと思って、思ったときに兵庫県立大学の大学院減災復興政策研究科っていうのが出来たんです。で、そこを受験しまして、だから僕1期生なんですけど、それで2年間本当に勉強しましたね。これ以上ないぐらい防災勉強しました。僕防災0やったんでね。大学院って教えてくれると思ってたら教えてくれないから。大学院ってのは研究するところやから、ベースがあって研究する訳やから、そこがない人は死ぬほどやらないとだめで、本当に本を読み漁りました。で、大学院を修了することができ、その大学に入ったときに石田さんと出会いました。石田さんはね、僕の担当教授の紹介なんですね。

石田：そうですね、音楽で知り合ったわけじゃないっていう。どこで何が繋がるかってわかりませんので、皆さんもね、人生の一つ一つを大事にしてほしいなって思うんですけども。僕がじゃあどんな風にしてKAZZさんと出会うまで歩んできたかっていうね、次のバトンを受けてお話したいなって思います。僕も実は1.17は神戸の北区で経験しました。ただ北区なのでそんなに大きな被害なかったの、なんか同じ神戸だから「あのとき大変だったでしょう」とか言っていたんですけども、ちょっとそれに対して後ろめたい記憶があったりとか、なにかその分余計に頑張らなくっちゃなっていう気持ちもありました。そういったことがあって、今につながっている

のかなと思うんですけども、生徒会ですら、ボランティア活動をしたりとか、それぞれボランティア元年というところから、そういうことが出来るようになっていったっていうのはすごく感謝しています。たぶん今神戸学院大学の中でもいろんなボランティアの活動があったりとか、ボランティア支援室が学内にあるっていうのはすごいことだと思って思うんですけど、それもやっぱり26年間で培われてきたボランティアの心が、皆さんの中に根付いていってるんじゃないかなと思います。

僕は音楽を神戸の街から発信したいなって思ったのも、やっぱり震災の経験が大きいんですけども、歌の中にもですね、震災をテーマにした曲ってのはいっぱい作ってきました。そういう活動をずっとしてきたんですけど、やっぱり色あせてきたときに東日本大震災が起きて、そこからボランティアに行くようになったんですね。実は僕もそういう泥かきとかのボランティアってそれまでやったことがなくて、最初はすごく不安でいっぱいだったんですけども、宮城県の石巻市というところに、震災の直後に1回行ったんです。正直1回は行っとかないとあかんって思ったんですけど、逆に言うと1回行けば、神戸の人間としてとりあえずの役目は果たしたかなという感じがあったんです。そういう甘い認識で行ったんですけども、実際その現場を見るとですね、とてもそんな自分の心の問題で行くような場所ではないし、復興には何年もかかるってことを目の当たりにしました。こうやって泥かきをしたりとかですね、炊き出しのお手伝いをしたり、物資の配給をしたりとか、いろんな復旧のお手伝いをしてる合間にですね、実は慰問コンサートもさせて頂きました。KAZZさんは震災のあったそこで生まれ育ち、そこで屋台村で歌うというのがルーツになってますけれども。

僕は、阪神・淡路大震災も大きかったんですけども、実はこの東日本大震災の被災した皆さんの前で歌ったっていうのがすごく大きな経験になっています。まさに避難所なんですよ。避難所で生活されている方々に、よかったら前に出てきてくださいって言って出てきていただいて一緒にコンサートしたんですけど、そしたら正直ですね、行くまで「歌なんか本当に喜んでもらえるのかな」ってすごく心配でした。売名行為って言われたらどうしようとか。だって、みんな家を無くした人たちですよ。もしかしたら家族を亡くしたかもしれない人たち、いったいなんで声掛けたらいいですかね。最初に何歌えばいいですかね。人の心に寄り添うって簡単に言うけど、僕簡単に受けて「歌いますよ」って言っちゃったものの、その日が近づくにつれて何も考えてなかった自分に気が付いて、すごく焦りました。めちゃくちゃ不安になりました。みなさんだったらたぶんね、いろんなことを学んだりとか経験もあると思うので、自分だったらこうするっていうアイデアがあるかもしれませぬよ。そういう経験が既にあるかもしれない。でも僕初めてだったので本当に不安で、どうしようって思ったんですけど。結局答えが出なかったんで、実はこの時ですね、いろんなヒット曲の入った歌集を持って行きまして、みんなに配りました。で、「今聞きたい歌があったらリクエストしてくれますか。正直僕何歌っていいかわかんないまま来ちゃいました、ごめんなさい。」って言って配って、それをみんなに歌ってもらったんですね。そうやってみんなが前で歌っていくうちに、どんどん打ち解けていくんですよ。僕が歌うより。で、最後の曲を歌うときもこの様子。みんながね、肩を組んで体揺らしながら大合唱してくれたっていう。自分でも想像もしなかったような光景が広がって、みなさん本当に涙流しながら喜んでくださいました。「また来てくださいね」って言っていただいたことがきっかけで、それ以来ずっと毎月絶対来ますねっていう約束で通い続けて。最初の5年間は毎月1回のペースで通って、そのあとは

2. 3か月に1回のペースで今も通い続けています。

先月も久しぶりにGO toトラベルで行ってきたんですけども、今日はその時の写真はないんですけども、でもね、もうすぐ10年ですけども、まだまだね、復興の途中だなんて感じはします。直後はね、まだこんな様子でしたね。これは宮城県女川町の町の中心部なんですけど、町の中心に高台があって、そこに病院が建ってます。その病院から街を見下ろすとこんな様子で、一番高い建物の屋上に車がひっくり返って載ってると、すくなくともこの高さまでは津波が来たってことですよ。すごいなって見降ろしました。震災の当日も、ここに避難した人たち、すごいなって言って見下ろしていたそうです。すると、山の裏側から回ってきた波に飲み込まれてしまったということをお聞きしました。実際女川町の町立病院の1階の天井近くに、この高さまで波が来ましたっていう線が引かれています。十数mの波が来たんですね。恐ろしいことが起きた。次の南海トラフ地震では34mの波が来るかもしれない、最大の場合、高知県の黒潮町。

KAZZ：津波って点じゃないからね、面で来るからね。34mの高さが面で来るんだよ、それを考えただけでめちゃくちゃ怖いよね。

石田：しかもそれがね、地震が発生して、最短で第一波が来るのが早いところでは2分、全国的にも10分以内に来るところがたくさんあって、20mクラスの波が来るかもしれない。でもこれはあくまでコンピューターのシミュレーションですから、その想定を下回ることもあれば、もしかしたら上回ることもあるかもしれないと、そういったことを考えるとですね、念のために出来る限り高いところに避難するということがいかに大切かということを、現地でまざまざと思い知りました。でも、これだけ来る来ると言われていても、南海トラフの津波にどれだけ僕らが備えられているかなっていうと、やっぱりまだまだだなんていうことを関西に帰ってくるとすごく思います。

これはある新聞記事なんですけど、みなさん「津波てんでんこ」っていう言葉知ってますか。防災学んでる方は常識のような言葉だと思うんですけど、津波の時はずらばらばらでいいから、まずは自分の身を守りなさいという教えですよ。でも全国の7割の人は知らないという答えだったということで、数年経ってますのでそこからはちょっとは意識が変わってきたかもしれませんが、でもまだまだだと思うので、それを、音楽活動を通じてもっと多くの人に伝えたいな、そういうことで僕も勉強しました。防災士の資格を取ったりとか、最近は自然災害調査士とか危機管理士とか、家屋の罹災証明が出せるようにその勉強もしたりとかしてるんですけども、そういう活動をしている中で、大学の先生とも知り合って、交流が出来て、そこからその先生の紹介で**KAZZ**さんと人防で出会うっていうね。

KAZZ：そうなんですよね、これが運命のいたずらっていうのかわからないけど、僕は本当に音楽やめようと思ってたんですよ。とにかく二十何年経って伝わらなくて、もっとやっぱり防災をちゃんと勉強したいと思ってたから、音楽をやめてそっちの道でって思ってしまってたんですよ。でも、そこでまた防災をやってる音楽をやってるって人に会おうって、そんなことありますか？それでしたら一緒にやりましょうって、次の日に声掛けました。それでの3年間なんです。石田さんが避難所で歌いに行っただって言ったでしょ、みんなが声を出したって、あれすごい大切なことで、なんでかっていうと、避難所に行くからね、自分から声出せないよね。だって周りみんな

誰が親戚が死んでる人がいるかもしれないし、声出せんじゃん。どんどん重い空気になっていく。でも石田さん、気持ちで行ってあげると、やっぱり打ち解ける、声を出せる、そしたら前向きになる、これすごい大事。だから寄り添うってたぶんそういうこと。本当に、同調しながら、ちゃんとした心をもって行く、これがやっぱり大切。まず石田さんは泥かきをした信頼関係を作ってから歌った、本当にそれが大事。これだけ今日はちょっと覚えて帰ってほしい。

石田：ありがとうございます。そんな地元の人たちとの寄り添いの中で、皆さんの一言ひとことを繋いで繋いで作った曲を次に聞いてください。宮城県石巻市の皆さんのメッセージ、やっぺす石巻。

楽曲「やっぺす石巻」

石田：ありがとうございました、やっぺす石巻という曲でした。やっぺすというのは東北の方言で、「いっしょにやりましょう」という言葉です。僕だけが頑張るんじゃなくて、みなさんと共にやっていたらと思います。この動画もそうなんですけど、BloomWorksの動画もYouTubeに上がっておりますのでね、もしよかったら皆さんもチャンネル登録して何回でも聞いていただいて、広めて頂ければそれが防災に繋がっていけばいいなという風に思っているんですけども。ただですね、僕らずいぶんここまで音楽の力ってことで熱弁してきましたけれども、本当にそんなことは可能なのか。防災を音楽で伝えられるのか。音楽で人の命は救えるのか。これめちゃくちゃ大事なことですよね。

KAZZ:でも、石田さんも僕もそうだけど、石田さんも避難所で歌ったでしょ、僕も屋台村で歌ったけど、ちょっと実感はあるんだよね。これって力がなかったら僕ら今やってないからね音楽って。でも、それをちゃんと客観的に調べるとか、それが研究なんだけど、そういった形をせなあかんね。そういうのはあるのかな、みたいなところですよ、まずは。

石田：僕らもそれを確信を持ちたいというところで、実はですね、インドネシアのスマトラ島沖地震の被災地まで行ってきました、去年。なんとですね、ここの被災地に、音楽によって多くの命が救われたという事例が実際にあるということを知ったんですね。飛行機でこのスマトラ島に行ってきたんですけども。インドネシアのね、アチェ州というインドネシア最北部の地域です。軽く紹介ムービーを。

(紹介動画)

石田：ということで、いったいどんな出会いがあったのか、ここからはそのお話をさせて頂こうと思います。まずインドネシアがどういうところかというところからご紹介しましょう。人口はおおよそ2億6千万人ということで、日本の倍以上の方が住んでいらっしゃいます。ただ、大小いろんな島がありまして、なんと島の数が1万3千、島それぞれにいろんな文化がありまして、当然言語もバラバラなんですよね。600言語とも言われております。公用語はインドネシア語ということなんですけれども、僕らは主につたない英語でコミュニケーションをさせて頂いております。

た。宗教としてはほとんどの人がイスラム教徒ということです。僕らが行ったアチェ州というところは、特にイスラム教の戒律の厳しい地域ということで、むち打ちの刑が未だにあったりということで、かなりビビりながら行ってきたんですけども、ここですすね、実際に歌で多くの命が救われた事例があるということや人と防災未来センターで習ったんですけども、それはどんなことだったかという、2004年に発生したスマトラ島沖地震、全体で20万人以上の方が犠牲になられたんですけども、震源のすぐ近くのシムル島という島があるんですけども、ここですすね、代々歌を歌い継いできたことによって、ほとんどの人が助かったっていうんですすね、実は100年前にも同じような津波があつて、その経験、教訓を歌にしたことによって島民のほとんどがそのことを覚えていて、ちゃんと避難できたということなんです。

KAZZ：シムル島の隣のニアス島の人たちは、シムル島の人全員が終わったんじゃないかって言われてたらしいよ。

石田：みんなダメだったろうって思われてたんですけど、奇跡的に犠牲になったのはわずか7名、ニアス島の方は震源からより離れていたにも関わらず、700人以上の方が犠牲になったと、人口比が違うんですけど、人口比で比べると10倍以上の方が多く被害を受けているということすすね、これがシムル島、人口およそ7万8千人に対して、犠牲になったのはわずか7名、一方のニアス島は、人口72万人分の700名ということすすね、およそ10倍ほど被害が大きかった、ずば抜けてシムル島は奇跡的に多くの命が助かったという風にも言えますすすね、それはなぜかという、さっきも言ったように歌で100年前の教訓を代々歌い継いで来たからということなんです。

現地の言葉で津波のことは「スモン」って言うんですすね、このスモンの歌っていうことでスモンソングって言ったりもしますけども、この「スモン」という曲を知っていましたかというアンケートをすると、9割近くの方が震災前から知ってたよと、そして、地震が起きたときにそのスモンソングを思い出しましたかという質問をすると、7割以上の方が思い出したと、思い出したからすぐに避難行動をとれたということをおっしゃってるんですすね、つまりそれだけ、音楽というのは語り継ぐ力があるということです、東日本大震災のときにもね、前に来た津波の石碑はあつたけども、やはり風化していくことによって、その意味が分からなくなってしまつたりとか、伝える力が薄らいでしまったということが課題となっていました。

KAZZ：だって「津波てんでんこ」も、7割の方が知らないんでしょう。

石田：だから言葉や物だけでは伝えられない部分を、音楽だったらもっと長い時間繋ぐことが出来るんじゃないかと、そう考えて実際現地に行ってきたわけすすね、このスモンが聞きたいということで行かせて頂きました、これは震災当時の様子、僕らが行つたのは去年、15年経ってからの様子なんですすすね、現地のコーディネーターの方に案内して頂いて、今も遺構として残っている家屋の上に乗った船とかすすね、ここで語り部しているおばあちゃんのお話を聞いたり、いろんなことをさせて頂きました、その中で、津波博物館というところがあるんですけども、ここでコンサートをさせて頂きました、音楽ってやっぱりすごいなって思った瞬間がありまして、その映像をちょっとご覧いただきましょすすね。

(津波博物館でのコンサート映像)

石田：なんで日本語で「せーの」って言ったのに合わせれたのか、それが今でも不思議なんですけど、なんか呼吸でしょうね。とっても歓迎して頂いたわけなんですけども。

KAZZ：ものすごい盛り上がって、新聞の一面になるぐらいなんです。ものすごい盛り上がりで、次の日の新聞の一面になりましたね。

石田：基本的にエンターテインメントってものがほとんど無いんですよ。こういうコンサートとかも、厳しい戒律の中で普通にエンターテインメントだけってのは出来ないということで、それを日本とインドネシアの津波被災地の交流ということで、意味のある歌だけを選んでですね、あらかじめ歌詞の内容も全部検閲して頂いて、そのうえでやるということをしたんですけども、日本人のプロアーティストとしては初めて、この津波博物館の中でコンサートをさせて頂いて、言葉の意味はわからなくても、本当に喜んで頂きました。海外のいろんな支援が入っている中で、日本人の支援というので、日本語学校があるということでこちらにもご案内頂いて、子供たちとも交流をしました。

(日本語学校での映像)

石田：これは手話歌をしてくれてるんですね。日本語の歌を覚えてだけでもすごいなと思いますけど、こうやって手話もしてくれました。実はここでみなさんから防災メッセージの寄せ書きをしてフラッグにしてるんですけども、このメッセージも皆さんから寄せ書きしてもらいました。スモンの4番に津波って言葉が出てきます。すごい綺麗な曲ですよ。

KAZZ：まるで子守唄のようなね、子供たちを寝かしつけるときのような美しいメロディーで。特にララさんはすごく歌が上手な人で、聞いてて「ああ、だからね」と、だからシムル島の人たちはこの歌で助かったんだね。寝るときにこうやって歌ってくれてたんだねと。

石田：めちゃくちゃいい曲だから、これだったら広まるだろうなと。

KAZZ：もうその時は二人で合点しましたね。

石田：着いて早々この歌に出会えて「よかったよかった」と思ったんですけども、実はそうじゃなかったんです。実はこの歌は、もともとある原住民の方が歌ってきた伝統音楽を現代風にアレンジした、震災の後にできた曲だということをお聞きしたんですね。歌ってる意味自体は一緒なんです。「もし強い地震がきたら、もし海の水が引いたら、高いところを探そう。自分の身を守るために。」と、こういうシンプルなメッセージが伝えられているということなんですけど、それを聞くとやっぱりね、シムル島までちゃんと言って、現地の原住民のオリジナルを聞きたいなという風に思いますよね。

KAZZ：やっぱりどんだけ美しいメロディーであったり、どんなものに出会えるんだろうっていうのはすごくあったので、とにかく行ってみようと。でも行くにもものすごい大変なところで、飛行機もプロペラ機だからね、普通のジェットでは飛ばないようなところだったんで。まわりまわって行かないといけないようなところでね。でも行ってよかったなと、今になったら思います。

石田：ララさんともコラボさせてもらったんですけど、時間の都合でこの辺は巻きでいかせてもらいます。新聞にもこのように載せて頂きました。そのあとですね、スマトラ島からプロペラ機で小さなシムル島に実際に降り立ちまして、町の様子を見たんですけども。本当にね、小さい町で人口7万人ほど。桟橋が津波で被災したところがそのまま残されているところの海辺に、もう一度街を作って、元通りの生活をしているというのが印象的でした。

KAZZ：だって普通で考えたら、またそこ津波来るからやめたらいじゃないって思うじゃない。でもまたそこに作る。なんでそこに作るんですかって話を聞いたの。普通で考えたらめっちゃくちやおかしいやん。だから聞いたら、「いや、また津波が来たら逃げたらいいいからね」って。合点がいくようなかなような。でも、その人たちの中にはそういう教えがあるんですよ。

石田：海と共に生きているからこそということですよ。ここの人たちはほとんどこうやって漁業で生計を立てていらっしゃるということで、海と共に生きる。そして何かあったらちゃんと逃げることが共通の認識になっている、これも一つの文化だな、インフラに頼らないというのも一つの方法論だなという風に思いました。でもね、実際高台へ駆けあがるって言っても、高台って僕らの思うような避難路があるわけではないんですよ。この密林を走るんですよ。こんなところを駆け上がったっていうので、ヒルが居たらどうしようとかですね。

KAZZ：ヒルに噛まれるから自分たちは行かない方がいいよって言われたんです。

石田：ちょっと見てみたい言ったんですけど、やめたほうがいいって言われるぐらいのところを、地元の人たちは避難した、次も同じ道をたどる覚悟でいらっしゃるということで、非常に印象に残っております。そんな本当に自然と共に生きている人たちだからこそ生まれてきた伝統芸能のスモン、お聞きいただきたいと思います。

(動画)

石田：伝統芸能のナンドンという音楽の一節なんです。長い伝統芸能の音楽の中のスモンのチャプターを披露して頂きました。ちょっとね、全部聞くと16時間ぐらいある音楽なので、その中の一部分だけを抜粋してお聞きいただこうと思います。

KAZZ：ここ聞くだけでも厳かな気分になりますよね。

石田：本当に神事といますかね、そういう伝統芸能としての音楽なんだなということは思いますが、逆にこれがずっと代々伝わってきたことはすごいなという風に思いますね。

KAZZ：そうですね、僕らも聞いた時びっくりしすぎて。

石田：僕らはポップなものだと思った、子守唄のようなものだと思った、それで納得がいったんですけど、実は地元の人にとってのカルチャーはこれなんです。若者もこの曲に誇りをもって。すごいことですね。やはり地域が違くと伝え方、伝える文化の形が違うんだということをごく実感しました。で、このナンドンという伝統音楽の中で、地域の島の自然、歴史、神々のこと、いろんなことが歌われてるんですけど、その全体の16時間のうちのおよそ16分間、17分間ぐらいが、津波のことを歌っているということなんです。このナンダンのスモンを実際に見させて頂いてですね。このあとこの方々とコラボもさせて頂きました。

こういった奇跡のような交流をさせて頂きまして。ここでね、最初に聞いた子守唄のスモンのことをお聞きしたんです。今、このシムル島以外の地域では、ナンダンスモンの気持ちの部分伝えるために、形を変えてポップな形になっているそうですね。後で聞いたところによると、高藤洋子先生という立教大学の先生の話によると、ダンスバージョンの全然違う曲があるんだということもお聞きしました。そういったことを聞くと、伝統音楽を大事にされている方はどう思うのかなって、不思議ですね。どうなのかなって思ったんですけども、それに対する答えにすごく感銘を受けました。「もちろん自分たちの文化は大切にしたい。でも、たとえ形が変わったとしても、それによって人の命が守られるのであれば、どんどん広めてほしい。」そういう風に言うてくださったんですね。だから、Bloom Worksの二人も、日本に帰ったら自分たちなりの形で広めてほしいと、背中を押していただきました。

KAZZ：これね、一つだけね。このナンダンスモンね、みんなこのところだけ見るとすごい昔の風景見てみたいでしょ。でも実は違うのよ。ここにいる人たち、みんなスマホを掲げてるんですよ。スマホを掲げて、みんなにSNSで送ってるんですよ。それぐらい、こういう文化もあって共存してるってことなんです。それをみんなカッコいいと思ってる、それをSNSで「ここでナンダンのこうやってるよ」というのを、みんな流してるねん。だから僕らシムル島行って、次の日大人気。めちゃくちゃ人気やったから。だから、すぐ変わるってことじゃない。もちろん昔から良いものは良いものとして残りつつ、それもカッコいいと思いつつ、新しいものが出て変わっていても良いという元々の伝道者が居つつ、っていうのがシムル島。これがすごいところだと思う。そしたら僕たちは僕たちなりのスモンを届けようよっていうところで。

石田：そうなんです。なので、自分たちなりのスモンソングを作ろうということがそこからの活動の一つのテーマになりました。実は今年の夏にですね、このコロナ禍なのでオンラインなんですけど、ワークショップを開催しました。人と防災未来センターの夏休みオンラインワークショップということで、参加者の皆さんから「今伝えたい防災のメッセージ」を一言ずつ募って、それらを繋いで繋いで防災ソングを作ったんです。この時県立大学の室崎先生にも来ていただいて一緒にさせて頂いたんですけども、その時に作った曲っていうのはYouTubeにも上がっておりま

すので、そのワークショップの様子と共にぜひ皆さんもご覧いただき、これ僕たち今後ライフワークにしていきたいなと思っています。やはり対象が違ったり地域が違ったりしてきますと、伝えたい思いも変わってくると思いますので、それを日本全国いろんなところでやっていくことによって、そこで集まった人たちの防災力を、関心をちょっと高める。そうした機会にしていくことが文化になっていけば、これも一つの音楽で出来る防災の力を高めるということになるのではないかなと、そういう風に思っていますので。もしも機会があればなんですけども、また神戸学院大学の学生の皆さんと共に、そういった機会も設けられたらうれしいなという風に思っております。その時はぜひ皆さんもご参加いただきますようよろしくお願いいたします。

KAZZ：お願いします。

石田：はい、ということで、ほかにも防災ソングいっぱい作ってるんですけど、今日はちょっと時間も押してまいりましたので、最後にですね、学生の皆さんにワークショップももちろんこれから参加してもらいたいですけど、もう一つ参加してもらえたら嬉しいなと思うことをPRさせて頂いて、あと最後1曲で終わりたいなと思います。もしかしたらKAZZさんがね、前期にリモートでお話した中にもフェスの話があったかもしれないんですけども、改めてですね、僕ら防災のフェスをやってるということをご紹介させて頂こうかなと思います。

KAZZ：AEDっていう、これも面白かったんだけどね。

石田：やりたかったんですけどね。AEDの使い方をね、ラブソングで覚えるっていうふざけた歌があったんですけど。

KAZZ：今日は結構いきましたね、楽しかったですね。

石田：このね、防災のフェスなんですけれども、BGMスクエアという名前でやっております。防災減災ミュージック、バックグラウンドミュージックって二つの意味で二乗なんですけれども。ここで集まって頂いた皆さんのおよそ9割の方は防災の意識が高まったよと。そして全国から集まって頂くことによって、いざというときの助け合いのネットワークを事前に作ろうということも狙いにしております。津波の高さを怖がらせるんじゃなくて、楽しみながら学ぶバルーンのワークショップをやったりとか。防災機能を知ってもらおうということで、マンホールトイレが全60基あるんですけども、視察の時はいつも決まったやつしか開けてなかったと、残りのやつは一回も開けたことがないというのを聞きまして。それいざというとき困るよねということで、毎年このフェスをやることによって、全部開けましょう、使える人を増やしていきましょうということもやっております。こんな感じで、ずらっと並んでるんですね、これ全部トイレなんですよ。でも実際やってみると、このテントじゃ心許ないよねとか、女性の方特にね。隙間があったりするので、そういったところもいま改善策を出して、みんなでワークショップをしております。ほかにもいろんなガイドツアーをしたりとか、このように自衛隊の人が来てくれたりとか水族園さん来てくれたりとか、いろんな方が参加してくれました。これ広島大学の学生さんですね、豪雨災

害の支援をしている方が来てくださったりとか、一緒に学生さんが屋台をしてくれたりとか、そういうことを通じて、楽しく防災や生きる知恵を身に着けていただこうということで、参加者の皆さんも、そういうことを通じて防災意識が高まったよという風に答えてくださいました。

で、ごみ問題ってよくお祭りとかでは出ますけれども、これもですね自衛隊方式でごみを減量しようということで、同じ種類の器同士をきれいに重ねていくことによって、ごみを圧倒的に減らすことが出来ました。災害現場で被災地のごみ問題っていうのもすごく大きいので、こういうときにも生かせるということで、皆さんもしも何かイベントするときは、ごみはこういう風にとするとコンパクトになるんだよってことは覚えておいていただけると、別に被災地じゃなくてもね、役立つと思います。

KAZZ：これほんとにね、僕らはそんなこと最初考えてなかったんですよ。でもやっていくうちに、「こういうことやったらどう？」っていうアイデアがこれになったからね。やるのが大切なのよ、やることによって、そしたらまた「こうしたらいいんじゃない？」っていう意見が出てくるから。でもやらなかったらそれで終わりだからね。だからやった方がいいよ。

石田：その思いをですね、学生さんが伝えてくださることによって、それを形にしていくと、そういう実行委員会形式をとってしまして、実は関西中心にいろんな大学の人たちが実行委員になってくれてました。神戸学院大学の学生さんの中からも実行委員として参加して下さった方がいらっしやいます。ということでですね、このコロナ禍でなかなか次いつどのような形ということがまだまだ見通しが立っていないんですけれども、一応来年の秋には開催したいなということで、それに向けて今後実行委員の募集などもしていく予定にしております。ぜひですね、これからBloom Worksの情報をチェックしておいていただいて、もしそういうことが出たときにはですね、みなさんも奮ってご参加して頂ければなと思います。ほかの大学の学生さんたちがどんな防災の活動をしているかを知るいい機会にもなると思いますし、大学間を超えてブラッシュアップをする機会にしてもらえたらとっても嬉しいです。

今日は防災を文化にしていこうということで、少しでも皆さんに僕らの熱と楽しさっていうのを伝えられたらうれしいなと思ってやってきたんですけれども、みなさんもぜひ一緒に参加して頂いて、この防災をカルチャーにしていきたいと思います。ということで、最後の曲ですね。コールアンドレスポンスの曲なんですけれども、このコロナ禍ですから心の中で、皆さんも一緒にレスポンスして頂いて、フェスのイメージを共有してもらえたらと思います。じゃあちょっと駆け足でしたけれども、最後の曲、プロムナード。

楽曲「プロムナード」

石田：では、最初にお約束した合言葉を最後にみなさんとやらせていただいて、僕らの講義を終わらせて頂こうと思います。

二人：みんな、絶対にまた、笑顔で会いましょう！ ありがとうございます、Bloom Worksでした。